

# 幼児の社会性に関する一考察(1)

## 『出会い』について

上垣内 伸子

子どもは、自分の周囲の人・物・事柄に対して『出会い』を繰り返すことによって次第に社会的な能力を身につけていくといわれている。どのような出会い、対応し、関係を発展させていくかということ、子どもの社会性を考える上での重要なポイントになるのであろう。中でも人との出会いには、他とは異なった面白さがあ



るような気がする。それは相手の対応が複雑で予想もつかないからかもしれないし、お互いの気持ちを通じ合ったときの喜びからくるものかもしれない。そうした人が人と出会うときの面白さ、『出会い』の持つ意味について、子どものかたわらにいてみつけた小さな『出会い』の事例を手掛かりに考えてみることにする。

### (一) 初めての出会い

#### △事例Ⅰ▽

夕方M(2歳2か月、男児)が母と散歩をしていると、駐車場のすみの方で誰かがしゃがみこんで猫に餌をやっているところに出会った。

「ニャンコだー。」

猫に気付いたMは、母の顔を見上げて嬉しそうに言うところそと近づいて行った。

そこには、Mと同じくらいの女の子と、その子のお母さんとおばあさんらしき人がいて、子猫に缶詰をやっているところだった。Mは、女の子の隣に同じようにしゃ

がみこむと、黙って子猫の食べる様を見守った。Mと母が加わっても三人は気にして顔を上げることもなく、子猫もガツガツと食べ続けている。

「よっぽどおなががすいていたんだねえ。」

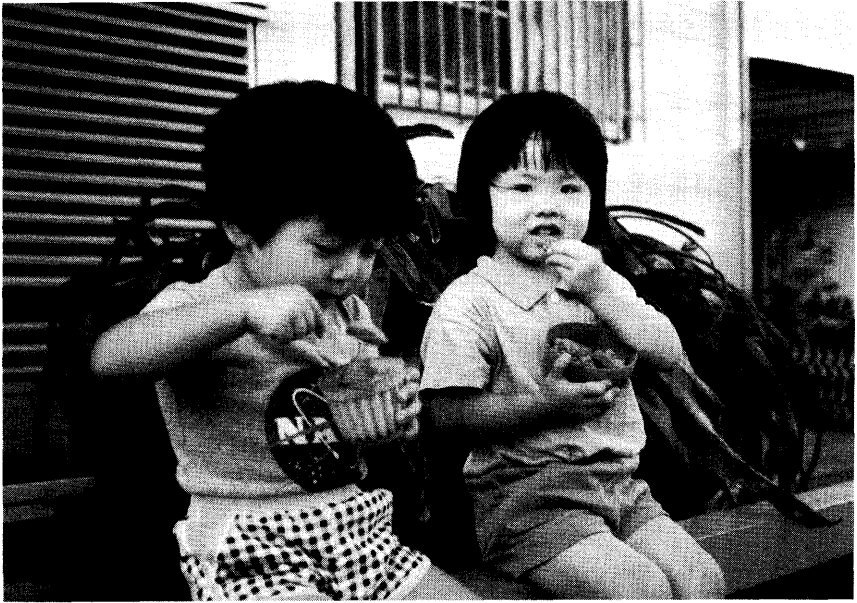
「ほれ、しっかり食べな。」

とお母さんとおばあさん。

「うわあ、ねこがごはんたべてるー。缶詰ね、たべてるんだよ。」

Mが口を開くと、女の子は初めてMの顔を見た。そしてそっと子猫の頭を撫でてもう一度Mを見た。その子の無言の誘いかけに応じるかのようにMも子猫の頭を撫で、二人で顔を見合わせてにっこりとした。

女の子は今度は子猫の背中に触った。Mもすぐと同じように背中を撫でる。そうしてくすくすと小さな声で笑いあった。女の子が触るとMがすぐにまねをして、二人顔を見合わせて笑うという繰り返してあるが、頭を撫でたり背中をつついたり、次第に大胆に触り始め、笑い声も体の揺すりも次第に大きくなっていく。子猫は迷



惑げにしゃっぽではらうがそのしゃっぽさえ二人はつかもう  
としている。

「食べてるんだからじゃましないんだよ。あんたたち  
だってご飯の時じゃまされたらいやでしょう。」

おばあさんにたしなめられた二人は手を引っ込めた  
が、まだくすくす笑い合っている。

子猫はガツガツと食べ続け、お母さんは子猫の食べる  
速さに合わせて缶詰から魚を少しずつ出してやってい  
る。

二人はいつの間にかびったりとくっついてすわってい  
たが、女の子はMの肩に手をまわすとのぞきこむように  
してMを見てまたにっこりとした。Mも同じように手を  
まわすとほほ笑み返した。そして二人はそれまでよりも  
一段と背中を丸めてかがみこむと、じっと子猫が餌を食  
べるのを見ていた。

乳児期以来Mの行動は、「何だろう。」という好奇心で  
支えられている。この時も「猫」「人だかり」「何だ？」

という興味で近付いていったに違いない。が、Mが近付いても猫も人も誰もMの方を振り向かないばかりか物も言わない。そこでMは同じようにしやがみ込んで子猫を見守ることにする。

人と人が出会うということは、物理的に見れば、同じ空間を共有するということであろう。出合いの場が二人が共に今存在する場である。そしてその場の持つ雰囲気をも共有したとき、『出合い』が成立するのではないだろうか。そつとしやがみ込んだことで、Mは場の雰囲気も共有したように思う。

『出合い』から関係が更に発展していくためには、気持ちを通い合うこと。同じような感情を共有することが不可欠だ。ここでは、Mが口を開いたのをきっかけに女の子からの誘いかけが始まる。ことばではなく身振りとはほほ笑みだけの誘いかけだ。Mは、遠慮がちに同じことをまねて繰り返す。女の子が子猫に触れる↓Mがまねる↓二人で顔を見合わせて笑う——この三つの行動の循環の中で気持ちが次第に通いあってくる。女の子の心の小

さな弦の響きにMの弦が共鳴して大きなうねりになっていくかのようだ。

何が二人の気持ちをこれほどまでに通い合わせやすくさせたのだろうか。相手の動きを受けて動く・そばにいる・ふれあう・顔を見合わせる・笑い合う——Mと女の子がとった一連の行動は、総てが否定ではなく相手を受け入れるものであったように思う。初めての出合いを展覧させるうえで重要なのは、まず受容することであり、その最も端的な表現が同じことをまねて繰り返すことなのかもしれない。

#### △事例2▽

Mは母に連れられて夕方買い物に出掛けた。

「あ、いくら。Mくんねえ、いくら好きなんだよ。おとうふもねえ、好きなの。」

「じゃあ、お豆腐買おうか。」

商店街の店先をのぞきながら母もMもゆっくりと歩いている。すると向こうから赤ちゃんとお母さんと四歳く



らしいの男の子がやってきた。いきなりその子はMの前に立ちただかると「マスクマン！」と言いなざらキックやチョップのポーズをとって向かってきた。余りに突然の見知らぬそれも自分より大きい子からの攻撃に、Mがどう対応するのかと見ていると、最初は何の事だか判らず

突っ立っていたが、『わかったぞ』とでもいう風にニコッとすると、「ボクシング！」と言いなざら握りこぶしを交互に突き出した。

今度はその男の子がびっくりする番だ。予想外の反応だったのか彼は動きを止め、ボクシングの真似をするMをいぶかしげに見ていたが、ケラケラと高い声で笑いながら2〜3メートル逃げていってMの方を振り返った。

Mはすぐに彼を追い掛ける。「まてー」と言いなざらボクシングの格好のまま走っていった。彼が逃げるとMが追う、Mが追うと彼が逃げるで、マスクマンとボクサーの追いかけっこが始まった。Mは終始ボクシングのポーズでがむしゃらに腕を前に突き出しながら走っていく。男の子は時々振り返って「○○キック！」などといいながら逃げていく。二人とも顔はクシャクシャ、笑い声も

上ずって興奮しているが、実に楽しそうだ。

その様子に母親同士顔を見合わせ苦笑しながら見守っている、走り疲れて二人はそれぞれの母親のところへ戻ってきた。

「バイバイ。」

買い物を続けるために反対方向へ歩き始めたが、二人は振り返って手を振り合っていた。

初めての出会いがたちまち遊びへと発展していった事例である。突然のマスクマンの攻撃が追いかけてこなくなっていたきっかけは何だったのか。

Mはマスクマンのことは知らなかったけれども、男の子の行動の意図を理解してボクシングの格好で応じた。男の子も自分の予想とは異なっていたかもしれないが、Mの意図を理解して「逃げる」「攻撃する」ことで追いかけてここに展開させていった。マスクマンとボクサー、表現型は異なっていたが、二人がそこに共通のテーマをみつければ、そのテーマを共有することで関係が発展していったのではないだろうか。

出合いの場の雰囲気・感情・テーマを共有することで、初めての出会いが発展していくように思う。

## (2) 親しい関係の中で

### △事例3▽

ある朝のこと。Mが登園すると、げた箱の前のテラスで先生や大きいお友達が「Mくんきたよ。」「Mくんおはよう。」と迎えてくれる。いつもの朝の始まりだがこの日はそれらがちょっと違っていった。

先生に手伝わされて靴を脱ごうとしているMのところへ、部屋の中からTが真つすぐ駆けて来る。タタタッとMの正面に来るといきなりほったをグイとつかんだ。一瞬動きを止めたMも、次の瞬間手を伸ばすとTのほったを同じようにギュウツとつまんだ。二人はほったをつかみ合い見つめあっている。声をたてることも振り払うこともなく、互いに見つめあったままだ。

と、Tがぐるりと背を向けてげた箱から自分の靴を取り出してMの前につき出した。そのまま黙ってTはMの横に座って靴を履き始める。それを見てMも脱ぎかけた靴を履き直す。先生に助けられて履き終えた二人は、並んで砂場に駆けて行った。

Mは保育園に通っており、Tは同じく2歳2か月の男児。目下のところ、お互いが一番の遊び相手である。Tは病気でしばらく休んでおり、この朝は一週間ぶりの出会であった。この事例は、『出会い』の持つ緊張感に気付かせてくれる。

Tにとって、病気で休んでいた一週間は何とはなく不安なものだったかもしれない。いつもの園庭、いつもの教室、いつもの友達——。この「いつも」に戻るために、いつもと違う出会いが必要だったのかもしれない。頬をグイッとつかむことは、これまでの二人の関係を危機にさらすことになる。Mが振り払ったり逃げたりという拒否の行動を起こす可能性のある働きかけだからだ。しかし、敢えてTはいつもと違う緊張感を伴った出会いの場面を作ることで、逆にMとの関係を確かめようとしたのではないだろうか。

果たしてTの思惑通りMは頬を同じようにつかみ返すことで応じ、二人の関係は無事（？）確かめられ、いつ

もの二人の遊びへと展開していった。この朝の出会いには、Tが一週間の空白を埋め、園でのいつもの生活を取り戻す重要なきっかけであったと思う。

### (3) 出会いの後で育つもの

#### △事例4▽

MはいとこのY（3歳11か月、男児）と夏休みに8か月ぶりに会い、Y宅で数日を過ごした。

会うたびにそうなのだが、今回も一緒に遊ぶことがなかなか出来ない。殆ど一日を物の取り合いや叩き合い、押し合いに費やしているかのようだ。自分が遊んでいるものを取られることは、あたかも自分の領域が犯されることのように激しく泣く。自我の形成という発達段階にあるのだからとは判っていても、ほとほと困ってしまった。

そんな二人だが、Yの方は、Mが帰ってしまった日の夕方保育園から戻ると家中を捜しまわり、Mがいなくなったと知ると大泣きしてしまった。Mは、自分の家に戻

ってから、「Yさんと花火したんだよ。」「ええっとね、Yさんとね、せみつかまえたの。」と、しばらくYのことを話し続けていた。

一か月位たってYから電話があり、「Mくんげんき?」「うん、げんき。」と一言ずつ話すと、後はニヤニヤしながら受話器を握っていた。

対決・ケンカ・仲たがいと称されるような場面も『出会い』の一つには違いない。相手を拒否するということは、拒否という表現を用いて関係が成立しているということであろう。そのように相手の存在が心に残っているからこそ、後から楽しかったことを思い出すことも起こってくる。その場の現象だけに目を向けると、物の取り合いとか叩き合いといったマイナス面ばかりが目立ってしまうような関係の中にも、お互いを大切な存在と認識する心が育っているように思う。

(お茶の水女子大学)



訂正 十一月号3頁、48頁の

『年長年少』は『年長少年』と

訂正し、お詫び申し上げます。

編集部